

第2回 兵庫型「体験教育」の評価・検証委員会 次第

日 時： 平成 22 年 10 月 6 日(水) 10:00～

場 所：西宮市男女共同参画センター411 学習室

1 あいさつ

2 資料説明

3 兵庫型「体験教育」の現状・課題等

I. 総論

II. 兵庫型「体験教育」の実施状況とその効果

III. 系統性のある効果的な体験活動とするために

IV. 体験活動の成果を日常の学習活動や生活に根付かせるために

V. 体験教育を県民すべてがかかわる教育とするために

4 その他（会議の公開について）

第2回 兵庫型「体験教育」の評価・検証委員会 議事要旨

平成22年10月6日（水）10：00～12：00

西宮市男女共同参画センター 411 会議室

1 開会

2 あいさつ

開会後、溝口教育次長が挨拶を行い、前回にひきつづく形で、兵庫型「体験教育」の評価・検証についての審議を依頼した。

3 資料説明

協議に先立ち、兵庫型「体験教育」義務教育部会・高等教育部会からの報告及び兵庫型「体験教育」の現状・課題等についての説明が事務局より行われた。

4 協議

委員A

- 体験活動によって、生徒が成長することは確かである。今後は、より多くの生徒が体験できるよう、全体のバランスをはかりながら検討していく必要がある。また、コーディネーターがいれば、取組が容易になる面もあると思われる。

委員長

- データを読み取る際には、ある体験活動に取り組めば、すぐ効果がでるというようなことはないということを意識しておく必要がある。体験活動によってルールやマナーが身についたりというような例はあるかもしれないが、生命への畏敬の念等高次の概念などは、活動と直接的に結びつかないことも多い。森有正の言葉を借りれば、「体験の経験化」ということが大切だ。
- こういう体験をすると意欲が高まる、あるいは学力が向上するというような直結はないと考えるべきだ。たとえば、幼稚園に通う子どもと、保育園に通う子ども、いずれにも通っていない子どもとでは、学力が異なるという結果があるが、それは、どこに通っているかということが要因なのではなくて、経済的な要因がからんでいる。また、朝ご飯を食べると成績があがるというような分析もあるが、これも家庭における子どもに対する親の配慮の厚さの違い等の要因が関わっていると考えられる。このような背後に隠された要因を見逃してはならない。現場を預かっている方々であれば、このようなことが感覚的にすぐわかることと思うので、積極的に意見を出してほしい。
- 「兵庫型」というときの「型」というのはタイプという意味ではなく、兵庫県がイニシアチブをとって発展させてきた体験というものの多面的な総体というようなことでとらえていただきたい。「心の教育緊急会議」は、非常に印象的な会議であり、課題をプラスに転換する力があつたと感じている。

委員B

- 「トライやる・ウィーク」を立ち上げた当時は、必死の対応で、兵庫の教育がつぶれるのではないかという思いすら感じていたことを思い出す。子どもたちを地域に任せるといふ初めての取組にあたっては、本当に可能なのか、地域の協力が得られるのか等、皆が消極的な発言の中、当時の貝原知事は賛成であった。事業スタート当初は非常に効果的であったわけだが、現在、どうも当初の原点がどこかに行っている感があり、修学旅行等と同様に行事化してしまっている。子どもたちではなく、教員や地域社会がマンネリ化してきていると感じており、今こそ評価検証をして、その効果を再確認することが大事である。

委員長

- 兵庫型「体験活動」は、やはり「トライやる・ウィーク」によって流れが作られたと言える。体験と言ってもよい体験ばかりではなく、マイナスの体験もある。例えば、阪神・淡路大震災や須磨の事件はトラウマになる。これらのトラウマを覆してゆき、「心の耕し」を行うことが必要である。

委員C

- 資料5ページにある義務教育部会の報告内容のうち、「各活動の接続」という項目の中に、「すべての教員に周知してほしい」という内容があるが、教員だけではなく、生徒、保護者、受入先を含めた対象に「こういう意図で、この時期に、こういうことをしている」ということをきちんと周知してほしい。県民の共通理解のもとに体験活動が行われている状態にすべきである。
- 体験と学業のつながりを切り離して考えてほしい。新渡戸稲造の『武士道』は、カナダ人の奥さんが日本は宗教教育なしにどのように道德を教育しているのかという疑問を持ったことに対する答えとして書かれたということである。兵庫型「体験教育」は、大げさに言えばこの『武士道』にあたるものとして考えており、発達の段階に応じた体験教育は、道德的な教育プログラムになると考えている。
- 資料5ページの真ん中、「それぞれの活動内容について」の中の、「トライやる・ウィーク」の部分について追加してほしい。一言でいえば、愛に出会う活動であるということだ。愛という言葉は、思いやりや優しさという表現でもよい。いつも受けている親や先生からの愛情は、ふだんの生活の中ではなかなか気付くことができない。「トライやる・ウィーク」の体験の中で、場所・相手が変わることで、愛を受けていることを実感できるようになる。子どもは愛を食べて生きている。愛を受けていない子どもは崩れていく。普段接する機会の少ない大人の愛に触れることで、身近な親や教員にも感謝するようになる。

委員D

- 自然学校やトライやる・ウィークについて、当初は実践報告が自然に聞こえてきたが、最近あまり聞かなくなった。あまりにも当たり前になってきている。

- 自然学校は、情報化社会の中でバーチャルな擬似体験があふれかえる中、「本物に出会わせる体験」が必要だということでスタートし、トライやる・ウィークについては、人間関係の希薄化を課題として「子どもたちに生きる力を育む教育懇話会」が開かれ、さらに須磨の事件を経て「心の教育緊急会議」が設置され、地域における人間関係の希薄化を打開するという意味で事業がスタートしたと理解している。このようなスタート時の思いをもっと取り入れた提言内容としてほしい。
- 阪神・淡路大震災も神戸市須磨区の事件も、未曾有の出来事であり、とにかく皆が手探り状態で考えていた。学校の教育活動としては、学習指導要領の枠を超越した取組であると思っている。そういう状況でやってきたからこそその「兵庫型」であり、喧喧諤諤の議論を行って原点を押さえ直していくことが必要である。

委員長

- 学習指導要領は、ある時期色々な意味でしがらみとなり、「標準」とされていた。しかし、2003 年の 12 月の告知によっていわゆる「最低基準」となったことで、体験活動は指導要領の枠にかかわらず、取り組めるものとなった。教育課程は学校が責任をもって編成できるものであるということを再確認しておきたい。

委員 E

- 小・中学校の体験は、自尊感情や命の大切さ等を伸ばすものとなっており、高校入学後の積極的な活動につながっている。高校においても、様々なボランティア活動が実施されているが、全員に強制的にやらせているわけではなく、希望する生徒が行っている状況が多い。それも単発的なものではなく、継続性を持った活動にすることによって効果が期待できる。すべての生徒に地域貢献をさせるということではなく、地域貢献に行こうという気持ちを起こさせる指導を行うということが大切である。
- インターンシップについては、高校ではやはり進路との関係の中で考えることが必要である。高校卒業後すぐに就職する生徒の多い職業科がある一方で、普通科等では大学に進学する生徒が多く、一律一様には考えられない。また、インターンシップは受入先である企業に多大な負担をかける事業でもあり、受入企業側にもメリットがあるような仕組みが必要かと思う。
- シティズンシップ教育の話も出ているが、キャリア教育とからめて、高校から企業に直結するパターン、高校から大学を経て企業につながるパターンなど、多様な対応が必要である。大学を間にはさんだインターンシップの形を追求する必要がある。

委員 F

- マンネリ化ということが言われているが、子どもにマンネリはない。子どもたちは、やはり初めての体験で緊張感を持っており、受け皿である企業の方々にノウハウを含めてマンネリ化があるといえるのではないかな。
- 学校のマンネリ化という点で、体験活動を日常の教育活動にどう生かしていくかには若干課題を感じている。学校では、運動会、音楽会、修学旅行などさまざまな

イベントがあり、総合的な学習の時間、道徳の時間、特別活動をすべて体験活動やその事前事後指導に使えるわけではない。そのような中でも、「トライやる・ウィーク」の発表会や、学級新聞、「トライやる・アクション」としてのもちつき大会などを行っているが、どうしても、一度形を作ってしまうとそれを踏襲していく傾向がある。多忙感もある中で、どう工夫を加えていくか、教員が考えるべき課題だと常々感じている。

委員G

- 自然学校について、昨年インフルエンザが重なり、実施時期が延期となった時には、子どもたちや保護者から「延期されても、4泊5日の日数でやってもらえるのか」という質問が多く、期待の大きさを感じた。
- 5年生は、自分を少し外側から見ることができるようになる「自立の芽生え」の時期であり、5年生のこの時期に実施することに大きな価値を感じている。また、「3日目の変化」は確かにある。3日目にトラブルなどが発生し、それを乗り越えることで子どもたちは成長していく。おやつもバーチャルも全くない状況の中で、寝食を共にする生活は、その後の学校生活に生かされていく。
- 環境体験事業についても、学校内で行っていた活動を発展させて、少し活動範囲を広げて行う形のものになっており、活動に広がりを持たせていることに効果を感じる。

委員H

- 兵庫型「体験教育」として、6つの事業が軸になっているが、目的やねらいを達成しているかどうか、客観的にわかるような尺度をそれぞれの事業で定められることが必要ではないか。代用特性尺度というものがあるが、例えば、精神的な豊かさが身についているかどうかについて、兵庫県の人が美術館や映画館によく行くかどうか、芸術大学への進学率が高いかどうかなどの指標によって、他の県や国と比較することが必要だと思う。就職の定着率について「7／5／3」とよく言うが、その率はここ10年間それほど変化していない現実がある。この体験活動は、感覚的には私も良いものだと思うが、本当に社会人・職業人としての基盤づくりに寄与しているのかどうか、尺度がないままでは効果がよくわからず、尺度が示されて初めて兵庫型「体験教育」の効果が検証されるのではないか。
- また、どうしても子どもに対して教員がやさしくなり過ぎて、子どもがいわゆる「しんどい」仕事を避けがちであり、子どもへの過奉仕になっていると感じる。しんどいことも辛抱してやらせることが教育であり、「トライやる・ウィーク」や「インターンシップ」でも、そういう場면을体験させることが必要である。

委員長

- 楽なことばかりではなく、「しんどいこと」をさせようということ、また、PDCAサイクルの中で事業を評価することが大切である。

委員 I

- 兵庫型「体験教育」の「型」の部分は「タイプ」という意味ではないが、現在の案では当時の状況やこれまでの経緯が十分に押さえ切れていないと感じる。創設時の途方に暮れた思い、熱い思いで取り組んできたことをしっかり伝える必要がある。県民すべてで育てる以外にない、というぎりぎりの思いがもっと反映された内容にしてほしい。
- マンネリ化という話が出ているが、やはり、マンネリ化しているのは、学校・教員であると思う。子どもや保護者はマンネリ化していない。トライやる・ウィークが学校行事化してしまっており、そこに命を吹き込もうとするならば、大人が謙虚に学ぶという姿勢を示さなければならない。学習指導要領の枠の中に詰め込もうとする必要はなく、子どもが中心にあったスタート時の思い、兵庫の人間を育てるという思いをうまくまとめてほしい。

委員 J

- トライやる・ウィークの創設時は、県民自体の盛り上がりがあったように思う。いろいろな困難を乗り越えて取り組んだという原点があるが、その当時の思いを県民が忘れて、なぜこの事業を実施しているのかがわからなくなっている現実がある。私自身も、「トライやる・ウィーク」のことはわかるが、「自然学校」の開始当初の思いは知らなかった。そういう原点をきちんと押さえていただきたい。

委員長

- 体験活動をどうこなすかということではない。各事業の関連付けは大切だが、それぞれが目の前の子どもにどういう力をつけたいのか、どういう原点から始まっていたのかを押さえた上で、大胆な打ち出しをしていくことが大切である。

委員 K

- 第1回のトライやる・ウィーク実施時に保護者として関わった経験があり、当時は、やはり学校と地域が近づいたという実感があり、中学生はこわいというイメージを払拭する活動になっていたと思う。現在、居住地である東灘区では、当時と比べると他県から入って来られた方が半数ほどおられるが、子どもたち自身は今も新鮮に取り組んでいる。
- 「トライやる・ウィーク」だけでは、学校と地域はつながれないと思う。祭や清掃活動を一緒にすることや、町の会議に学校管理職が出席する、といった常々の近い関係づくりが大切である。いつも、地域をつないでくださるのは誰かということが話題になるが、子どもたちのために皆がつながろうということが大切である。

委員 L

- 今日の議論の中で、「トライやる・ウィーク」に関する発言が際だって多かった。やはり、「トライやる・ウィーク」は課題の大きい中学生を対象にしていることもあり、画期的な取組であったと言える。ただし、すべての事業に共通しているが、す

ばらしい取組であるのに、それが見えていないという課題点を感じた。これは、大人の側の問題ではないか。すばらしい取組の中にもっと大人が価値を見いだして、子どもたちを「ほめる・認める」ということに努めること必要性がある。さらに、その価値をもっと共有化し、体験活動のすばらしさを手応えをもって感じていくということが大切である。

- 信頼できる大人が多ければ多いほど子どもたちは成長する。「あなたを信頼している」というメッセージを大人が子どもたちにもっと発していくことが大切である。
- 最近のトライやる・ウィークでは、3日目に受入先に行かなくなってしまう子どももいると聞く。我慢する力が足りないということを大人が認識して取り組むことが大切である。
- そもそも兵庫型「体験教育」の主たる6つの事業は、それぞれ異なる時期に、異なる課題に対応する形で生まれてきたものである。だからこそ、今回、これらを組み合わせていくときに、ストーリー性が必要になる。「どんな子どもに育てたいか」という共通のバックボーンの中で、それぞれの個別のねらいを明確にするということを考える必要がある。

委員M

- 体験活動が子どもの心の中にどう広がっていくか、効果をどれだけ持続させられるか、体験活動の広がりを持続性について考えることが大切だ
- 例えば、学校支援地域本部や放課後子ども教室など地域がかかわる取組とどう連動させるか等、日常生活に広がる活動とすることが大切である。また、人との関わりを豊かにするということを意識的にやっていくということも欠けてはならない視点である。

委員A

- 子どもたちに身に付けさせたい力として「自立して行動する力」「多様な人々とともに目標に向けて協力する力」「自然や文化を大切にする感性」「社会をより良く変えようとする姿勢」という表現になっているが、表現をすべて「力」にし、「4つの力」として打ち出す方がよいのではないか。

委員長

- 本日のご意見を踏まえ、事務局で再度練り直していただき、次回また議論を深めていただきたい。(了)